

夫婦の心理的満足度と相互のコミュニケーション スタイル, 情報量, 役割一致度¹⁾

吉 田 直 樹²⁾
津 田 彰³⁾

要 約

最近カップルの問題が増加しているということが指摘されており, わが国では欧米に比べ結婚や夫婦関係の研究が比較的少ない。そこで, 本研究では, 一番若い世代である 30歳代を中心とした夫婦に焦点を当て, 夫婦関係についての調査を実施した。調査対象者は未就学児をもつ夫婦489組 (978名) である。質問紙の内容は夫婦関係心理的満足度尺度, コミュニケーションスタイル尺度, 夫婦相互の情報量, 役割期待一致度尺度などである。その結果, 夫婦の心理的満足度については平均的だが, 夫の心理的満足度は妻よりも有意に高いことが見られた。エゴグラムを基本に作成された, 夫婦の相互のコミュニケーションスタイルでは, 自己認知や配偶者認知において, 夫と妻の間で有意な差が見られた。また夫婦相互の情報量は平均的であり, 夫についての情報量が多ければ妻についての情報量も増加する傾向が見られた。夫と妻のそれぞれの役割一致度においては, 夫の役割についての一貫度が高ければ妻の役割についての一貫度も高かった。

キーワード: 夫婦関係, 夫婦の心理的満足度, 夫婦のコミュニケーションスタイル, エゴグラム

はじめに

佐藤 (1999) は家族相談にも夫婦の問題が増え始めたことから1988年を夫婦元年と名づけている。理由は1970年代に家族の個人化は進行していたが, 女性が仕事をもちながらも主婦としての役割を果たすことで家族の求心力は保たれていた。しかし1980年代に入り, 女性の就業が増え家族の求心力は衰え, 少子化や高齢化の影響で家族の活力が低下し, そこで家族の中心である夫婦のあり方が問題となった。

また, 平木 (1999) によると「最近社会状況としてカップルの問題が多くなった」その問題点の一つとして「妻の専業主婦の生き方からの自立性と夫の古い夫婦観との不一致」を挙げている。女性にとって, 結婚・

子育てを第一に優先し仕事を選択肢の一つとした生き方より, 仕事を第一として結婚・子育てを選択肢の一つにする傾向があり, それにもかかわらず夫がその現実に気付いていないために男女の差が出ている。「このような現象は長寿国の3つの世代の家族観や子育て観の違いとして具体的家族関係の中に現れ始めている。」と指摘している (平木, 1999)。

しかし, 夫婦関係という分野は夫婦間システムという閉ざされ, 他者が関与しにくい領域である。研究においても, 調査対象者が得られにくいなどの理由から, 数井 (2003) によると欧米の豊富な研究に比べ日本では少ない。しかし, 人生80年となった現在, 夫婦だけで過ごす時間は増大し, 家族の個人化の影響もあり夫婦が注目されている。また, 菅原 (2000) によると夫

1) 本研究の一部は石橋学術興基金と喫煙科学財団からの助成金によってまとめられた。

2) 久留米大学大学院心理学研究科

3) 久留米大学文学部心理学科

夫婦関係は家族関係や子どもの成長に影響があるとされている。このような理由から夫婦関係に焦点を当てた研究は必要であると考えられる。

これらの視点に立ちこの研究では、子どもを持ち夫婦のあり方が問われる30歳代の夫婦に焦点を当て進めた。佐藤(1999)によると、婚約から結婚、第一子妊娠までは親密性の確立ということで、相似性や愛情が重視されるが、それ以後ははだいに相補関係に中心が移るとされている。この年代は、一般的に仕事も忙しく、まだ未就学児がいるということで子育てに費やす時間も多し。夫婦を中心というより子どもを中心とした生活がされており、夫婦だけの時間というのはなかなか取りにくいというのが現状である。したがって、結婚初期(結婚期間1年～2年)に比べ、夫婦間の共有情報量やコミュニケーションの時間や回数も減少する傾向が見られ、菅原(2000)の12年間の追跡調査によると、「子育ての時期にうまくサポートできていない夫婦は、中年期以降に急激に愛情が冷める可能性が高い」という結果も得られている。

また、夫婦の心理的満足度を考える時に、夫または妻としてどう自己認知しているか、また反対に配偶者をどう認知しているか、相互のコミュニケーション・スタイルは重要である。永田(1997)によると「夫および妻が行動する時に、それぞれが相手に一貫した関わりの態度や構えをもっている。」とされ、それは行動傾向として表現される。この行動傾向を形成するものがコミュニケーションスタイルである。また、それは夫婦システムの形成、維持、発展あるいは崩壊にも関係すると考えられる。

そこで、本研究では、心理的満足度や夫婦のコミュニケーションスタイル、夫婦相互の情報量、役割一致度を分析することで、30歳代を中心とした夫婦の概観を捉えた。

方 法

1. 調査対象

幼稚園や保育園などで1200組(2400人)に質問紙を配布し、回収できたのは734組(1468人)であった。空欄が3項目以上、MMPIのL尺度を用いて10項目中6項目以上の場合、不良データとし、最終的に489組(978人)を分析の対象とした。基本的属性は、年齢が30歳代中心(夫64.5%、妻70.5%)、結婚期間が3年～8年が61.8%、職業が夫の88.5%が会社などの常勤者で、妻の63%が主婦、家族構成が夫婦と子どもだけの家族が84%だった。

2. 測定尺度

①夫婦関係満足度尺度(15項目)

夫婦関係の多側面型測定尺度として1959年にLockらが作成したShort Marital-Adjustment Test(MAT)。夫婦関係についての満足度を変数として測定している研究において25%がMATを使用(菅原, 1997)、内容は、結婚生活に対する総合評価、夫婦間の意見の一致度、相互調整、共同活動の程度、家にいる時間の愛好度、配偶者に対する満足感、配偶者への信頼度となっている。MATのスコアリングは項目ごとに重み付けがされており、合計得点は2点から158点で高い得点ほど良好な夫婦関係である。

②コミュニケーションスタイル尺度(自己認知・配偶者認知 各30項目)

永田(1992)により作成された夫婦間のコミュニケーションスタイルについての尺度。自我状態を測定するエゴグラムチェックリストの尺度項目を利用し構成。CP・NP・A・FC・ACそれぞれ6項目で5段階評定法。

③愛情地図尺度(19項目)

Gottman(1999)により作成され、夫婦療法で実際に使われている尺度で、夫婦がお互いにどれくらい相手の情報を知っているか調べる尺度。

④役割期待一致度(自己認知・配偶者認知 各70項目)

國分(1980)により作成され70項目で、育児・社交・家計・決定権・性生活・夫婦のコンパニオンシップ・家事の7領域で測定される。スコアリングは、夫と妻の差が0の場合3点、差が1の場合2点、差が2の場合1点、差が3の場合0点とし、点数が大きいほど役割・期待の一致度が高い。

⑤MMPIのL尺度(10項目)

3. 調査時期

2001年9月上旬～10月下旬

4. 手続き

S市内の育児サークル・幼稚園・保育園の子どもの両親に質問紙を配布し、郵送または幼稚園・保育園で夫婦別々に直接回収した。

結 果

1. 夫婦間の心理的満足度(夫婦関係満足度尺度)

夫と妻の心理的満足度の対応関係を見るために、母平均の差の検定をおこなった。分析の結果、夫の心理的満足度は妻よりも有意に高いことが見られた($t=$

2.99で $p < .01$)。また、夫の心理的満足度と妻の心理的満足度との Pearson の相関係数を調べた結果、比較的高い正の相関関係 ($p < .01$) が認められた (Figure 1)。

2. 夫婦間のコミュニケーションスタイル

a : 夫の自己認知と妻の自己認知

夫婦間のコミュニケーションスタイルに関する、夫の自己認知と妻の自己認知の対応関係を見るために、夫のコミュニケーションスタイルの下位尺度と、妻のコミュニケーションスタイルの下位尺度の母平均値の差の検定をおこなった。分析の結果、A ($t = 6.70, p < .01$) と AC ($t = 2.36, p < .05$) は夫が高く、CP ($t = -2.50, p < .05$), NP ($t = -3.20, p < .01$) は妻が高かった。夫の自己認知と妻の自己認知の下位尺度間の Pearson の相関係数を調べた結果、FC において正の弱い相関 (比し $p < .01$) が

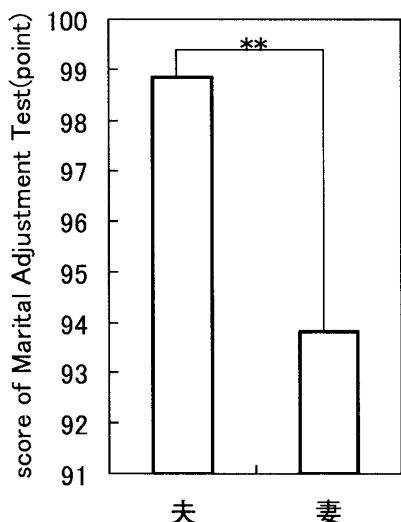


Figure 1 夫婦の心理的満足度 (** $p < .01$)

見られた (Figure 2)。

b : 夫の妻への認知と妻の夫への認知

同様に夫の妻へのコミュニケーションスタイルの下位尺度と、妻の夫へのコミュニケーションスタイルの下位尺度の母平均値の差の検定をおこなった。分析の結果、CP ($t = 2.03, p < .05$), NP ($t = 2.03, p < .01$), AC ($t = -5.87, p < .01$) は夫の妻への認知が有意に高く、A ($t = 6.16, p < .01$) は妻の夫への認知が有意に高かった (Figure 3)。夫の妻への認知と妻の夫への認知の下位尺度間の Pearson の相関係数を調べた結果、NPとFCにおいて正の弱い相関 ($p < .01$) が見られた。

c : 夫の自己認知と妻の夫への認知

同様に、夫の自己コミュニケーションスタイルの下位尺度と、妻の夫へのコミュニケーションスタイルの下位尺度の母平均値の差の検定をおこなった。分析の結果、AC ($t = 6.28, p < .01$), NP ($t = 2.33, p < .05$) は夫の自己認知が有意に高く、A ($t = -2.50, p < .05$) は妻の夫への認知が有意に高かった (Figure 4)。夫の自己認知と妻の夫への認知の下位尺度間の Pearson の相関係数を調べた結果、CPとFCにおいて正の比較的強い相関 ($p < .01$) が、Aにおいて正の弱い相関 ($p < .01$) が見られた。

d : 妻の自己認知と夫の妻への認知

同様に妻の自己コミュニケーションスタイルの下位尺度と、夫の妻へのコミュニケーションスタイルの下位尺度の母平均値の差の検定をおこなった。分析の結果、A ($t = -2.47, p < .05$) は夫の妻への認知が有意に高かった (Figure 5)。妻の自己認知と夫の妻への認知の下位尺度間の Pearson の相関係数を調べた結果、NPとFCにおいて正の比較的強い相関 ($p < .01$) が見られた。

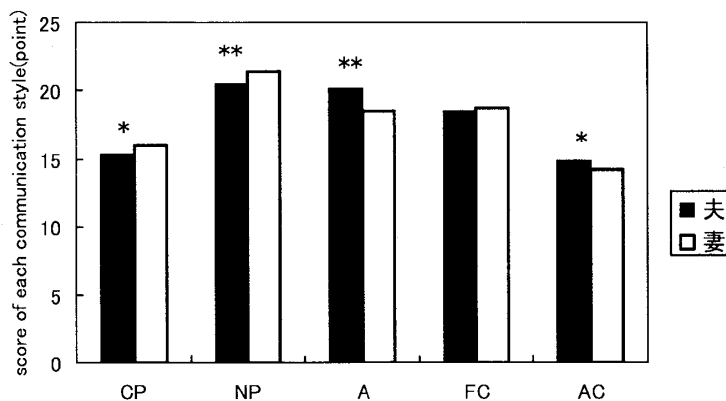


Figure 2 夫婦のコミュニケーションスタイル (自己認知)
* $p < .05$ ** $p < .01$

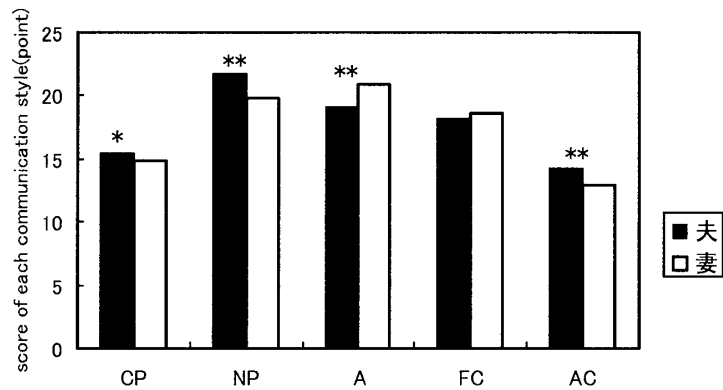


Figure 3 夫婦のコミュニケーションスタイル (配偶者認知)
* $p < .05$ ** $p < .01$

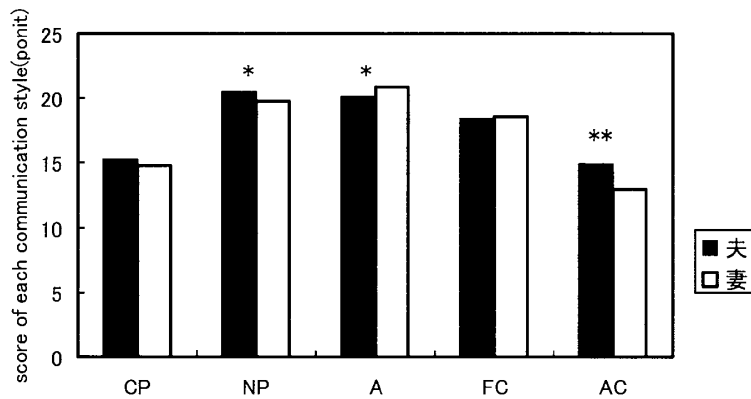


Figure 4 夫婦のコミュニケーションスタイル (夫の自己認知, 妻の配偶者認知) * $p < .05$ ** $p < .01$

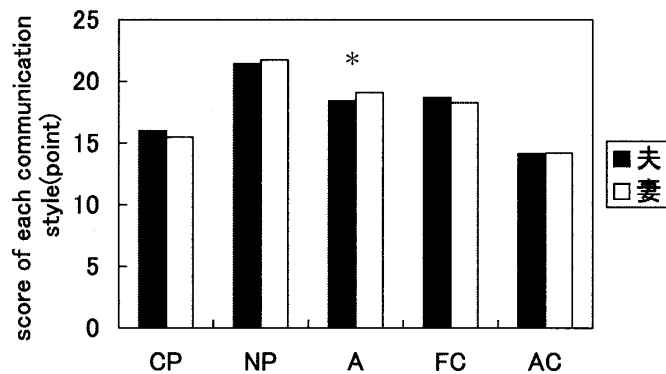


Figure 5 夫婦のコミュニケーションスタイル (夫の配偶者認知, 妻の自己認知) * $p < .05$

3. 夫婦間相互の情報量 (愛情地図尺度)

夫の妻に関する情報量と妻の夫に関する情報量について Pearson の相関係数を調べた結果, 正の比較的強い相関 ($p < .01$) が見られた。

4. 夫の役割, 妻の役割についての夫婦の一致度 (役割期待一致度)

夫の役割, 妻の役割についての夫婦の一致度の対応関係を見るために, 夫の役割に関して夫婦の一致度の下位尺度と, 妻の役割に関しての夫婦の一致度の下位

尺度の、母平均値の差の検定をおこなった。分析の結果、家計 ($t=49.62, p<.01$), 性生活 ($t=2.11, p<.05$), については、妻の役割に比べ夫の役割についての夫婦の一致度が高く、社交 ($t=-10.47, p<.01$), コンパニオンシップ ($t=-21.57, p<.01$), 家事 ($t=-9.78, p<.01$), 役割の一致度の合計 ($t=-2.14, p<.05$) については、夫の役割より妻の役割の夫婦間の一致度が高くなった。下位尺度間の Pearson の相関係数を調べた結果、役割一致度の合計と決定権において、夫の役割と妻の役割の夫婦間の一致度に比較的強い正の相関 ($p<.01$) が見られた。育児, 社交, 家計, コンパニオンシップにおいて、夫の役割と妻の役割の夫婦間の一致度に弱い正の相関 ($p<.01$) が見られた。

考 察

本研究では、489組の夫婦のデータを用いて、夫婦それぞれの心理的満足度やコミュニケーションスタイル、夫婦相互の情報量、役割一致度を分析・検討した。本研究で得られた知見を以下で考察する。

1. 夫婦の心理的満足度

夫婦関係満足度尺度 (MAT) は、ライフスパンに応じて多少上下はあるが、平均は100ポイント、カットオフポイントが85ポイントに設定されている。Gottman (1994) によると新婚期には15~20ポイント高く、第1子の出産後、75%の夫婦の心理的満足度が明らかに減少するという傾向が見られる。したがって、夫と妻両方の心理的満足度は平均に近く、カットオフポイントよりも高くなっていったことより、新婚期の心理的満足度の高い時期からしばらく経過し、子どもの誕生により低くなった状態、もしくは子どもの誕生により低くなったが多少満足度が戻った状態が推測される。また、夫の心理的満足度が妻の心理的満足度が有意に高いことは、MATの先行研究である菅原 (1997) の結果と同様であった。

2. 夫婦間のコミュニケーションスタイル

夫と妻の自己のコミュニケーションスタイルでは、夫は妻よりも配偶者に対して大人の心に基づくコミュニケーションスタイルを強くっており、妻は夫よりも配偶者に保護的な親の心に基づくコミュニケーションスタイルを取っていた。

夫と妻のそれぞれの配偶者へのコミュニケーションスタイルでは、夫は妻が保護的な親で順応した子ども

の心に基づくコミュニケーションスタイルを、妻が自分で認知するより強く認知していた。また、妻は夫が大人の心に基づくコミュニケーションスタイルを、夫が自分で認知するより強く認知していた。

夫の自己認知と妻の配偶者へのコミュニケーションスタイルでは、夫は順応した子どもの心に基づくコミュニケーションスタイルを、妻が認知するより強く認知していた。妻の自己認知と夫の妻への認知においては、有意な差は見られなかったため、差は少ないと考えられる。

夫婦相互のコミュニケーションスタイルにおいて、これらの点については、永田 (1997) の先行研究と同様の結果が得られており、30歳代と40歳代や結婚期間10年前後と20年前後の差は少ないと推測される。

3. 夫婦間相互の情報量 (愛情地図尺度)

Gottman (2000) によると、カットオフポイントが10ポイントだが、夫と妻両方とも10ポイントを上回っており、相互に情報を共有していると考えられる。

4. 夫の役割、妻の役割についての夫婦の一致度 (役割期待一致度)

夫の家計、性生活について果している役割については、妻と一致しており、妻の社交、コンパニオンシップ、家事について果している役割については、夫と一致している。役割の一致度の全体としては、妻の役割の夫婦間の一致度が夫の役割より高くなった。役割一致度の合計と決定権において、夫の役割の一致度が高ければ妻の役割の一致度が高くなる傾向が見られた。

今後の課題

この研究結果は、30歳代を中心とした末子が未就学児を持つ夫婦に焦点を当てたため、それ以外の夫婦にはあてはまらないことが予想される。それは30歳代でも共働きで子どもがいないと、結果は異なるであろうし、50歳代や60歳代の夫婦はまた世代が異なるので、世代間の相違や発達課題の違いも考慮する必要があるからである。

しかし、この結果は、様々な研究において夫婦関係が要因となっている場合や臨床の場面においても、夫婦の問題は家族システムの基本に当たるところなので参考になると考えられる。

今後の研究の課題として、夫婦間のコミュニケーションスタイルや夫婦相互の情報量などが、夫と妻の心理的満足度にどのような影響があるかを明らかにするこ

とが必要である。また, 研究が進んでいる欧米の方法を参考に, 実証的な研究をおこないそのエビデンスを検証することが不可欠である。

参考文献

- Belsky, J., & Kelly, J. 安次嶺佳子 (訳) 1995 子どもをもつと夫婦に何が起こるか 草思社
- Gottman, J. M. 1976 A Couple's Guide to COMMUNICATION Research Press Co.
- Gottman, J. M. 1994 What Predicts Divorce? Lawrence Erlbaum Associates, Inc.
- Gottman, J. M. 1999 THE MARRIAGE CLINIC W.W. NORTON & COMPANY
- Gottman, J., & Silver, N. 1988 THE SEVEN PRINCIPLES for MARKING MARRIAGE WORK John Wiley & Sons, Inc
- Gottman, J., & Silver, N. 1994 WHY MARRIAGES SUCCEED OR FAIL Simon & Schuster
- Gottman, J. M., & Silver, N. 松浦秀明 (訳) 2000 愛する二人 別れる二人 第三文明社
- 平木典子 1999 夫婦面接—その留意点, 工夫点— ケース研究 262 20-41
- 数井みゆき 2003 家族研究から家族カウンセリングに期待すること 家族心理学年報21 金子書房
- 國分康孝 1980 結婚の心理 福村出版
- 永田忠夫 1997 夫婦間システムにおけるコミュニケーション行動測定尺度の作成 愛知淑徳短期大学研究紀要 36 63-77
- 永田忠夫 1997 夫婦間システムにおけるコミュニケーション行動測定尺度の作成 愛知淑徳短期大学研究紀要 36 63-77
- 佐藤悦子 1987 向かい合う夫と妻 創元社
- 佐藤悦子 1999 夫婦療法 金剛出版
- 菅原ますみ・託磨紀子 1997 夫婦間の親密性の評価 精神科診断学 8・2 155-166
- 菅原ますみ 2000 夫婦関係の心理学—子育てとの関係から PSIKO 102-105
- 菅原ますみ 2001 夫婦関係の心理学—中年期夫婦の愛情のゆくえ PSIKO 60-65

Marital satisfaction and, communication style, information amount and consent of their each role

NAOKI YOSHIDA (*Graduate School of Psychology, Kurume University*)

AKIRA TSUDA (*Department of Psychology, Faculty of Literature, Kurume University*)

Abstract

The purpose of the present study was to examine the marital satisfaction, communication style, amount of the information, and consent of their each role in the married couples. Married couples who were almost in the third decade of life, 489 in total, completed a questionnaire that included the scale of Short Marital-Adjustment Test (MAT), couple's communication style, information amount (Love Map), and consent of couple's role. Result of analysis indicated that the score of MAT was average compared with that of U. S. and earlier study. There was a difference between the communication style of husband and that of wife. In married couples, sharing their personal interest suggested, they communicated effectively each other. The higher concordance rate of husband's roles was, the higher that of wife's roles was.

Key words: marital satisfaction, communication style, married couples, Short Marital Adjustment Test (MAT), Egogram